

大島塾新聞

ムロノキ
新聞社
第11号

広告



五島列島釣行記

二〇一七年十一月十一日(土) 小潮
満潮一五時三十分、干潮二十二時

十一月十日、早々に仕事を終えた向根、木村、筆者の三人は八時前には小雨ちらつく山陽自動車道を快適に走行していた。多少の風は出るらしいが天気は回復の予報で、心は踊っていた。筆者が買い替えた車は三人と道具を積むには小さく、今回は木村がワゴン車を出すことになった。車内が汚れないよう荷台はブルーシートでしっかりガード。途中の掲示板で佐世保道が通行止めになっていることを知り、行路確認のため急遽古賀インターに全員集合。重安は三七歳の森光君という看護師を同伴、宇田さんは谷川と登場。今回七名のメンバーである。武雄北方インターで高速を降りることを決め、それぞれ再び佐世保を目指した。

間もなくのことである。不意に筆者は便意を覚え、それは急激に深刻度を増した。悪いが次のSAで止めてくれと頼むと、それまで九十kmの安全走行していた木村はアクセルを踏み込んだ。助手席の向根はこの時とばかりに「洩らせ、洩らせ!」コールを浴びせてきた。「この外道が!」と思ったが、力を込めた肛門括約筋が緩みそうなのでじっと屈辱に耐えた。一方木村は「ぼか向根、やめろ。うちの車だぞ。助手席にブルーシートはかかってないんだぞ。じじい、絶対もらすなよ」、言葉にこそしなかったが心の叫びは確かに聞こえた。須恵のPAで事なきを得てほつと安堵、再び走り出した。すると間もなく車は猛スピードで次の基山SAに飛び込んだ。今度は木村を急な尿意が襲い、脱兎のごとく駆けける膝病み木村を初めて見た。けっこう速い。こんな下の話で笑いをねらうようじやあダメねと自戒反省。でもみんなそこそこの年齢になっているので、トイレには早めに行っておこうね。



全員集合午前1時 in ばらもん

【はだか瀬の向根と筆者】

朝の瀬上がりからずっと吹き続ける北西の強風と高いうねりに釣り場所を確保できずにいた筆者だったが、夕方からは徐々に風がおさまってきて久しぶりにはだか瀬のマツメ時を楽しんだ。暗くなりかけたころ、餌取りのタカベに代わって小グレが喰ってきたかと思うと徐々にサイズアップ。「きた、きた、時合じゃあ」などとほくそえんできると、予想通り尾長交じりに四〇センチオーバーのグレが当たってきた。愛竿剛徹にブラックストリーム3号は信頼のタックル。朝マツメ、今回一番の尾長を向根に掬ってもらった以外はよせ波にあわせてすべて抜きあげた。

向根の方は日中すでに四〇センチオーバーのイサキとグレを釣り上げており、夕方は筆者より先にマツメのグレを立て続けに追加したが、その後はばつたりと当たりが止まりめぼしい釣果を追加できぬまま夜は更けていった。歳のせいだとは思いたくないが、向根も筆者も一〇時を過ぎるころには今までになくすっかり疲れ果てていた。

昼間ほどではないもののまだそこそこの北風が吹きつけ、夜になると気温は急にながってきた。前回の釣行では雨水の侵入に全く無力だった向根のテント、今回はこの北風を遮ることができない。何のためのテントか、これじゃあまるで蚊帳、家の中で使うもの。その中でうずくまり凍える向根をランプが照らし、そのシルエットがテントに投影される。「かあちゃん、寒いよお」

向根劇場、いかがでしたか。今回も可哀そうでした。また次回をお楽しみに。



まだ宵のくちの向根テント
この後の不幸未だ知らず



朝マヅメ良型尾長

この日なぜかはだか瀬には猫が全く寄ってこなかった。春の釣行で「猫の洞窟」と化したかに思われたかつての我々の寝ぐら、そこにも全く気配がない。もしかして駆除されてしまったのではないかと不安になった。駆除された猫の怨念にとりつかれたら怖いので(そつちかい)、洞窟の外で寝ることにした。見上げれば満天の星空、筆者は熱めのお湯割り焼酎でこころをあたため、いつの間にか眠りについた。冬用の寝袋はいたって快適であった。片や凍えきった向根は「眠ったらちよつと死ぬかも」とテントを放棄。そのあとはずっと朝まで釣り続け、せめてもの慰め、数尾のイサキを釣り上げた。



【素人衆沖の荒磯に上がる】
谷川、重安、それに初参加の森光の三名は事前から「沖磯に行く」と意気こんでいた。ヒラマサを狙っているようだ。しかし筆者には一抹の不安。「やつら沖磯を知らない。強風の沖磯はかなりヤバイよ」。それでも彼らの意気込みにあえて意見はしなかった。船は六島から小一時間走って、白瀬を除けば最も西側に位置する平島(左地図赤○)周辺に釣り客を降ろし始めた。案の定おきなうねりは島全体を荒磯に変え、あわただしく磯上がりする常連のみなさんにも緊張感が漂う。時折ずるずると足を滑らせる危険な光景を目の当たりにした三人は完全にびびった。ポータルの「どこに上がりますかあ？」の呼びかけに、震える声が「あ、安全なところ」とシンクした。無事ママコの離れに上礁。



荒磯と化したママコの離れ

磯上がり間もなく重安がトップでヒラマサを掛け見事釣り上げていた。七〇センチクラスの良型。筆者とはちがう磯の出来事なので実況報告ができないのは残念だが、ヒラマサは磯のスプリンターと呼ばれるほど足は速くもトルクもある。よくぞ釣り上げたもんだ。食味はどうだった、重安君。また精進して来年は私にも一尾分けてくださいね。食味といえば今回初登場の魚「スマ」。カツオに酷似するが胸鰭の下に数個の黒い点が出るのが特徴で、成体は最大一mとカツオより大きくなる。近年は全身トロとして珍重されるようになり高知あたりでは養殖も始まっている魚である。これを初参加の森光が数尾ゲットし、筆者にも分けてくれた。三〇センチ前後の幼魚であったが確かにわさび醤油で食すと脂もあつて旨かった。今度はより大きなスマを期待している。



さてもう一人のルーアーマン谷川だが、シーバスマインの彼のスタイルは沖磯の青物には向いてないのか、日中めぼしい獲物は得られず夕方からはカゴ釣りにシフトした。これにより良型尾長、真鯛を含む数尾を釣り上げた。やはり彼にも年波は着実に忍び寄っているようで帰りのSAでは、筋肉痛のため「老人歩行をしていた」とは長老宇田さんの陳述であった。

【福祉の波止の二人】

その宇田さんと木村はホームグラウンド福祉の波止へ。どこぞ知恵をつけたのか宇田さんは佐世保の「かめや釣り具」でスロージグなる高価なルアーを大人買いしていた。「なにかやらかしてくれろのでは」と期待していたが何も起こらなかった。日中は小イカ一匹の貧果でこ機嫌ななめ。しかし夕方になると沖目に発見したポイントにカゴを投入し、次から次へとイサキを釣りまくった。木村から「宇田さん二、三〇匹のイサキ」の電話報告を向根が「良型イサキ三〇匹」と筆者に伝え、筆者は電話してきた樽尾さんに「四〇センチ以上の大型イサキを数えきれないほど」と伝えたものだから、ばらもん事務所ではちよつとした話題になっていたらしい。



あらっ、真鯛も釣ったの？

木村の方は前回来れなかった分「あれも、これも」と考えうる魚種すべてを釣つてやろう意気込んでいた。結局「やっぱ欲張っちゃあだめですね」というのが彼の結論だったが、まあそれでもアカハタやイサキ、鯛にグレ、そこそこ釣っていた(あつ、筆者はイカを分けてもらったね)ので、一年ぶりの五島を楽しんだことだろう。納竿前の八時頃だったろうか、波止の先端で木村がルアーロッドを大きくしならせた。遠目にも見応えのあるやり取りだった。足もとまでは何とか寄せたものの、魚は一瞬の隙をついて反転し一気に右へ走った。直後「あつ」という声とともにロッドはあえなく天を指した。ヒラマサに違いなろう、シーバスロッドで何とかできる相手ではないということか。そういえばママコの森光も一度強烈な当たりになす術がなかったといっていた。五島の海には私たちのタックルでは何ともならない相手がたくさんいる。そして本気でそれらを狙う人たちはどっふりとのめり込み、釣り人からは熱く尊敬されるが家族の視線はどんどん冷ややかに(あくまでも個人の見解です)。筆者は今のゆるーい釣りと仲間が大好きです。

今回何より気になったのは猫たちの

ことである。最後の最後にかつてのヤンキーキヤバ嬢さやかがやってきてちよつと安心したのだが、何かしら元気がない。気になってポーターに「もしかして猫は駆除された？」と聞いてみたがそんな話は聞いてないという。やさしくすればつけあがり、邪険にすると崇りやがる、そんな猫たち。おれば鬱陶しいが、いないと妙にさびしい。この次は元気な姿をちよつとだけ見せてくれるとうれしい。

食味談義。アカハタ、木村にもらつて初めて食した食通宇田さんもやはり絶賛した。初登場のスマは前述のとおり。口太グレは春に比べうまみを増していたが、やはり尾長には及ばない。我が家のいつもの飲み仲間の爺様たちも「食べ比べてみると違いがはつきりわかる」と尾長の味を賞した。しかし、しかしである。ある友人に勧められた「お刺身シート」。三枚におろした身をくんで三時間ほど冷蔵庫に寝かせておくと、口太の身が尾長を凌ぐほどの味と食感に一変した。驚き、桃の木、下関。この次はぜひ鯛で試してみよう。



仲間内では「五島の真鯛は美味くない」がすでに定説化している。長崎県人として筆者はひそかに悔しい。向根とともにこれまでメ方、冷やし方、活かし方など考えつくものはすべて試みたが、やはり通いの魚屋の鯛刺には遠く及ばない。もしかしたらこのお刺身シートが五島真鯛の汚名を晴らしてくれるかもしれない。ぜひみんなも体験してください。このシートはどこ釣具屋でも七百年程度(四枚入り)で売っている。「なんというメーカーかな」とふと裏を見てみると、な、なんと、かつてお世話になっていた岡本理研。なにか古い友人に偶然出会ったようなそんな気がした。

【編集後記】

筆者この度めでたく六〇歳の誕生日を迎えた。今回の釣行に先立つ九月某日、仲間が心づくしの還暦祝いを開いてくれた。私はこの仲間との飲み会がとて楽しい。これからもよろしくお願ひします。この新聞も今回で一〇号、前号から岩国医師会病院田のブログにアップされるようになりました。この楽しさを知り合いの人たちにも伝えてあげたら？ 今回の MVP は無数の巨大イサキを釣った宇田さんに決定。(福)

Gallery



祝

MVP初?受賞!



うわさのスマ、かなり美味

初披露、福祉の波止全景

あらま猫からの巣立ち

M. Fukuda's 60th birthday



ヨコスジフエダイです



みんなありがとう

